



第3号

# さらしなの里



「友の会」だより

2000・秋



長谷から望む冠着山（撮影・荒井君江）

てっぺんに神さん

「山あいへさ。めしやき餅さんざ食べられるに」

収穫の秋。小学校から帰ってきたばかりの私を母はおこびれ（おやつ）で釣って、よくりんご採りや桑摘みに山へ誘った。

私の生まれは塩崎の長谷寺のふもと。母はシヨイコ、私はボテを背負い猪平（えんてら）の池近くのりんご畑をめざす。石ころに躓いて転んだり、蜂に刺されたり…でも山道は楽しいのだ。大木の根元に蜘蛛の巣を発見。フワフワの巣をそつとつまんで「へんこへんこ…お茶飲み来おや」と呪文を唱えながら家主を誘い出す。歩き疲れて里を見晴るかす。南方に聳える冠着山を指して母は言った。

「てっぺんに神さんおいんなさるだと」  
祈ると願いを叶えてくれそうなこの山が好きだ。その後、私は二十歳の元旦を頂上で迎えた。

さらしなの里は、幼いころのふるさとの光景をよみがえさせる。そして今、この地の人々の豊かな笑顔に勇気づけられ、人を信じ助け合う温かな心に支えられている。

（荒井君江）

# 堂々の五位入賞

昨年は、レース直前に熱帯性低気圧の影響で急ぎよ中止になった。今年は、昨年のような災害のない天候を期待しつつ、第四回に向けていかだ作りの準備が始まった。八月六日まだ暑い

日差しの残り

午後、十数名の仲間たちが集まり、着衣を作る人、いかだを担当する人など、それぞれの分野に分かれ、和気あいあいのうちに進められた。大会前日の十九日の午後からは、いかだの出来栄えを見るため花柄池で進水式を行い明日の上位入賞を誓った。

コンテスト当日の会場は、ユニークな出場チームや各チームの応援団、実行委員会、ボランティアでにぎわっていた。参加チームは過去最多の六十六組。

## 水上で他チームと情報交換

我々のいかだは、故高島哲夫氏自筆の「縄文丸」と書かれたのぼりを立てて坂城大橋を六十二番目にスタート。女性二名を含む十人一組で戸倉町を中継点に、それぞれ前半、後半五名に分かれて



## 第4回千曲川いかだ下りレース

リレーした。水量は平年より降雨が多く増水していたが、縄文丸のメンバーは、気合を入れ「隠しタイム」を考慮し、ベストタイムをめ

ざしオールを漕いだ。流路は激流、激み、浅瀬、橋下通過ありで、ベストコースの選定、安全確保に注意を払い意気を合わせ目標に向かった。

猛暑の中、水しぶきを浴び、また水に浸りながら進める際、沿岸などに応援に駆け付けた仲間や住民らに手を振った。そして

時には水上で、同出場チームと情報交換し、エンジョイ。更埴市の千曲橋には余裕のゴールイン。

結果は堂々の上位入賞の五位。快挙である。(小松公雄)

## 大盛況励みに葱 芋作り



縄文まつりの焼肉コーナーは、毎年評判がよく、長い行列ができ大盛況。焼肉にはかかせない葱作りは、葱苗集めから始まり、五月中下旬に会員の手により、休耕田を借り、植え付ける。施肥、草取り、二回位行い、十月の縄文まつりに間に合わせる。

サツマ芋を植え付ける。昨年は芋が大きすぎて困ったので、今年は無施肥で収穫した。

(堀内本啓)

古代食 焼き芋コーナーのために、

# 義談 マムシ

一般に毒のあるヘビといえはマムシを指し、日本本土に平均的にどこにでも生息していると聞く。当地でこのマムシについて、何でもよく知っているというI氏にいろいろ聞いてみる。

第一によく出没する場所は、畑と

山の境目のような所で、石垣の上などの日向に多くいることがあるという。七、八月ごろ子供を産むらしい。それは一般的にいわれているように腹を食いやぶつて出るのではない。孵化するまで卵を体内で養い、それから産み落とす。ほかのヘビが卵のまま産み落とす中では昔の人にとりマムシの出産は神秘的なためそうした俗信が生まれたのだろう。

捕まえ方は木などの又様のもので、急所の首根っこを押さえ、首をつかむ。噛まれないようにビンなどに入れてマムシ酒を作る。マムシ酒はあまり飲用にはしないが、ある種の病に



マムシをデザイン化したとされる縄文時代の耳環(円光房遺跡出土)資料

## 神の化身と崇めた縄文人

効き目があり、うちみなどにぬるとよく効くのは一般に知られている。

身は白身の肉で、美味で栄養があり、強壮の特効があるという。またその内臓は何ものにもま

さる珍味  
だそうである。池の

草刈りなどで見つけたときは、その場で焼いて食べたそうだが、その後精力がついたという話はあまり聞かない。縄文時代のころにも生息していたらしく、その精力的で神秘的な行動態勢が、神の使いまたは化身として崇拜されたらしくイヤリング、土器などにその姿を残したものが出土している。

またマムシは目がよく見えなくて、温度と臭いで攻撃してくるらしい。体温などを感知してとびつかれて噛まれたりするので気をつけた方がいい。万が一噛まれた時は、早急に病院などに行つて適切な処置をしないと、その強い毒によつて死に至るので気をつけたい。これから冬眠に入るが、素人は見つけて動きがにぶくなつていても、絶対に手を出さない方がいいと戒めている。

花柄池付近、なべうらから山ぞいの石垣などに多く見るようだが、あまりお目にかかりたくない代物である。

(塚田克巳)

# おひよりの冠着

③

この山の諸方から湧き出す清水、何万年もの間、絶えることなく流れ出ているのは不思議極まる現象だ。

この山の麓は坂井村と更級の里にわたるが、両地の標高差が三百メートルあることから、山中の水は更級側に多く流れ出す。更級の

里にとり

「水を恵む尊い山」となる由縁である。

## 百年の水、更級を潤す

「こわ清水」は御麓の地に湧き出る泉、近年羽尾区の尽力で石組みが整備され新名所になった。水温は八度。手を切るような冷たさだ。「こわ清水」の名は、この水温と清冽な水の質によってつけられた。

ここは千年前、官道の支道が通っていたところで、山を越えた旅人はここに休息し力こころで、山を越えた旅人はここに休息し力こころで、山を越えた旅人はここに休息し力



をたくわえた。

「弁天様の出水」は仙石・湯の窪に湧き出る泉で、水温は一二度。夏は冷たく、冬暖かい感じのおだやかな泉で、弁天様のお名にふさわしい泉だ。水量が豊かなので、初冬のお菜洗いには近隣の主婦が集まって大賑わいであった。

### 大滝神社の湧水

「大滝の清水」は仙石・大滝社の鳥居の下に湧き出しているが、その元は今の社殿の下にあるという。泉の上にお宮を建てたもので、まさに「神様の水」である。

山中にも所々に湧水がある。最も奇観というべきは「樽の口」。山頂近い標高八百メートルの石ゴロに湧き出す泉は山仕事をする人々にとつて救いの泉であった。この泉の水が黒滝となる。

清水は降った雨が地中に潜り岩石の合間を抜け、どこかに集まって姿を現したもので、その時間は百年を要するという。ゆえに「水の化石」とも呼ばれる。(塚田哲男)

〔編集後記〕は虫類について解説した図鑑の中に「ママシは子どもを口からはき出す」という下りを見つけた。信じられなかったが、版元は大手出版社、しかも著名人の監修なので「本当かもしれない」。

日本蛇族学術研究所に問い合わせたところ「誤り」との返事。しかし、どうにも「ひよつとしたら…」という気分がぬぐえない。実際に出産シーンに立ち会った訳でもないのだし。それほどママシは現代人にとつてもミステリアスな動物だということだろうか。その「神秘性」に惹かれる気持ちは縄文人と変わらないのかも。

さて、前号でお知らせした「古峠」の映画ですが、これまでに集まった素材で十数分のビデオを作りました。題して「映画古峠物語」なので、ご希望の方はご覧下さい。(大谷善邦)

さらしなの里友の会事務局

〒389-0812

長野県埴科郡戸倉町羽尾二四七の一

さらしなの里歴史資料館内

電話026(276)7511

FAX026(261)4161